

**117 C T 及び R I 診断による甲状腺腫瘍の検討**  
 高須昭彦、岩田重信、西村忠郎、桑内隆郎、  
 桜井一生、小島秀嗣（名保衛大、耳）  
 竹内 昭（同大、放）

我々は結節性甲状腺腫に対して R I , C Tなどの補助的診断法により総合的に診断している。R I 診断に関して既に報告したごとく、<sup>99m</sup>Tc 及び <sup>201</sup>Tl の両者のシンチグラムの集積像より腫瘍、囊胞、炎症などの3つのパターンに分類して甲状腺結節の診断の一助としている。前回報告以後に経験した症例について C T も含めた診断上の検討を行った。手術を行い組織学的診断の明らかな17例を対象とした。内訳は悪性腫瘍11例、腺腫5例6側、甲状腺炎1例であった。R I 診断上は腫瘍16例17側の82%は腫瘍パターンを示した。部位により直径1cmの腫瘍も描出可能であった。又1例で肺転移巣が描出された。C T は結節の質を識別し得るような診断上の特徴は見い出せなかった。むしろ手術を行う際の周囲諸臓器との関連を把握するのに役立つと考えられた。今回我々の経験した症例のうち Adenomatous Goiter の3例はR I 検査で様々な集積パターンを示したので供覧した。

**119 甲状腺タリウムシンチグラフィの定量的評価—delayed scanの有用性について—**  
 沢 久、田中茂子、八幡訓史、波多 信、中島秀行、  
 谷口脩二、福田照男、池田穂積、浜田国雄、井上佑一、  
 越智宏暢、小野山靖人（大阪市大・放）、大北日吉、  
 須加野誠治（大阪市大・1外）

甲状腺腫瘍の良悪性の鑑別に<sup>201</sup>TlCl 静注3時間後の delayed scan が有用であることを報告してきたが、今回その定量的評価を試みたので報告する。対象は甲状腺腫瘍12例（A群）、甲状腺癌15例（C群）、甲状腺癌再発または転移10例（M群）である。

<sup>201</sup>TlCl 静注5～15分後（early scan）の計測では腫瘍/ background 比が A群 2.56±0.84, C群 2.75±1.23, M群 2.14±0.90 であり有意の差はなかった。delayed scan では A群 1.04±0.16, C群 1.49±0.63, M群 1.50±0.46 と甲状腺癌では<sup>201</sup>Tl が腫瘍部に残存する傾向が認められた。次に腫瘍部の<sup>201</sup>Tl 活性比（delayed/early）にて<sup>201</sup>Tl 消失速度をみた場合、A群 0.05±0.06, C群 0.28±0.18, M群 0.73±0.41 と甲状腺癌では腫瘍からの<sup>201</sup>Tl 消失が遅く、特にM群で消失が遅い傾向がみられた。delayed scan での腫瘍部の描出程度と early scan → delayed scan の<sup>201</sup>Tl 消失速度をみると甲状腺腫瘍の良悪性の鑑別に有用であった。

**118 甲状腺腫瘍のT<sub>l</sub>-201集積比**  
 筒井一哉、佐藤幸示（新潟ガンセンター、内）  
 渡辺清次（瀬波病院、R I ）

結節性甲状腺腫の組織型と T<sub>l</sub>-201の集積程度の関係をみた報告は少ない。手術により組織診断の明らかな悪性甲状腺腫26例と良性24例のT<sub>l</sub>-201シンチ（early scan）を画像分析した。病巣のとりこみ程度を具体化するため、病巣の一定面積のカウント数の対側正常甲状腺のそれとの比で検討した。

組織型別のタリウム集積比は、索状、管状腺腫 3.08±0.96 (n=6)、コロイド腺腫 1.09±0.28 (n=7)、良性囊腫 0.32±0.19 (n=10)、乳頭腺癌 2.62±1.33 (n=13)、汎胞腺癌 3.52±1.68 (n=7)、未分化癌 2.04±1.68 (n=4)、扁平上皮癌 0.24、細網肉腫 0.73 であった。良性では索状、管状腺腫が他の腺腫に比し有意に高く、悪性では分化癌全体は 2.93±1.68 (n=20)、とその他の癌 1.52±1.56 (n=6) に比し高く、分化癌の中でも細胞異型が比較的ないものは 4.14±1.91 (n=8) とあるもの 2.13±0.80 (n=12) に比し高い傾向がみられた。

以上、タリウム強陽性を示すものは良性としては比較的低分化な索状、管状腺腫、悪性では分化癌、その中でも比較的高分化のものであった。

**120 甲状腺腫診断における<sup>201</sup>Tl-C1 delayed scanの有用性—手術標本との対比について—**  
 杉本寿美子、渡辺幸康、川上憲司（慈大・放）、  
 篠崎 登、児玉東策（慈大、一外）、勝山直文  
 （琉球大、放）、多田勝彦（都立青山病院）、赤沢章嘉（都立青山病院、外）

確定診断の得られた51症例の甲状腺疾患につき、手術標本を参考にして充実性腫瘍と囊胞性腫瘍における<sup>201</sup>Tl-C1 の集積を比較し delayed scan における有用性を検討した。癌23例中、充実性腫瘍は21例、囊胞性腫瘍は2例で、充実性腫瘍において early scan で集積(+)は19例（90%）、このうち16例に delayed scan を施行し集積(+)は16例（85%）であった。腺腫13例中、充実性腫瘍10例、囊胞性腫瘍3例で、充実性腫瘍において early scan で集積(+)は5例、このうち delayed scan で集積(+)は2例（40%）であった。囊胞性腫瘍は early, delayed scan 共に集積(-)であった。更に腫瘍の大きさと<sup>201</sup>Tl 集積の関係を検討した。

以上より、<sup>201</sup>Tl-C1 は充実性腫瘍と囊胞性腫瘍の鑑別に有用であり、又 delayed scan は良性と悪性腫瘍の鑑別診断にも有用であった。